



日用心法鈔五編隨筆 上

□ 9  
1303  
12





口仁9  
1903  
12

安政二乙卯年八月

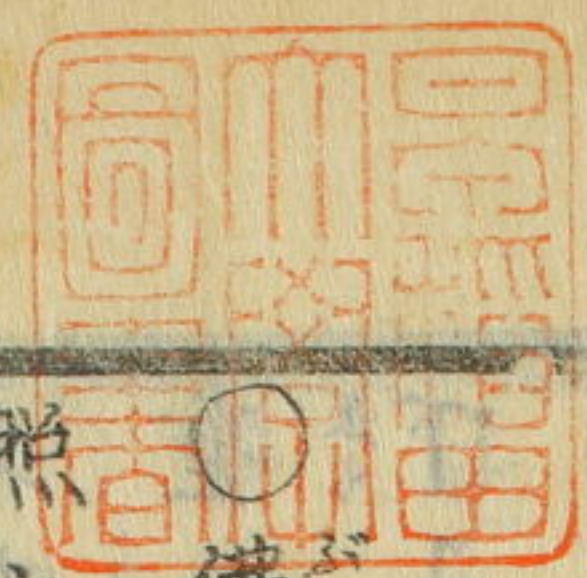
平假名

日用心法鈔五篇隨筆

三冊

東都下谷金杉

壽福軒述



日用心法鈔五編隨筆上

佛神聖人智者方ハ。儉約質素を守りて。何人。天

照大神の御儉素の思台一を。歌よんて

○儉約を志と。教へ伊勢の神。今已らやの宮よまほ

と。日本の宗廟第一の御先祖。御宮ハ。已らぶき。清供

米ハ三杵つきたる黒米。御菜ハ生塩。昔一の通るは志

て。御身分より。十分も廿分も見苦。宮よ已たらせ

ゆ。然るより數千年も後の下民共身分より。十分

も廿分もよき家。又住居を致し。着物も。くいものも。

身分不相應のおごり計り。是る故。罰當て。貧乏

日用心法鈔五篇上

一



あんぎを在る也。唐土の御先祖。聖人方も。常は藤服  
を着ひ。御殿ハかやぶきと表て。垂本もけつらぬわ  
む。上り段ハ土ま調へ五ふと何り。一切の佛方も皆かき  
ごとし。御定はりの位より。下の方より居ひ。地藏も觀  
音も文殊普賢も。實ハ佛なきとも。おさつと名乗るよ  
是御位よりひくき所はま一由はハ。皆儉約志川その  
謂也。夫故は御福分も沢山と表て。御安心の所は居玉  
ふあり。下民共も。何卒けんやく志川そを守り。佛神  
聖人の御心は叶ふやうと表て。身分より三分も四分も  
下は居て。福德を増し。飯米小をひは差支なきやうと

是也。是ぞ世は在む人の大切此飯米と小をひさへあ  
はむ。夫らして福德安心なり。此儀を能くさとるべし  
○良齊問話上三貴賤上下とも。財用困窮は礼を  
万事差支何り。損はる事多し。此故は学者經濟をよ  
くするを先と在べし。生計足さきむ。利をむさがり  
て。仁義礼智信の心を失ふ。然るは後儒生計を治む  
るハ。学者の道はあらむと。そある者何り。甚とあやま  
りふ里。凡そ人たる者ハ。生産を治むる事。何と云はれ  
困窮は在む。君は忠も尽しがたし。親は孝も出来がた  
し。親類朋友も。救ふるあはれむ。意のかの不義を行

日用心法抄五篇上



上事あり。孔子の家語にも。獸窮する時ハ。則ち攫つく。鳥窮する時ハ。則ち啄ぐ。人窮する時ハ。則ち詐るとあり。さきを經濟をよく屯るハ。今日第一の急務あり。貧ハ奢侈より起る。おごりの本ハ。衣食住の三ッあり。平日儉素を守り。おごりを制し。家業を出精し。足事を志つて暮すべし。老子とい曰く。足事を志すを。辱り志めらるる。止まる事を志すを。殆からむと有り。是又相違あり。家業を出精し。けんやくを守り。身上をよく志す。安心よくらすべし。世界第一の要道あり。人々急度心ゆふべし。衣食住を華美と志るハ。人々おめらるると思

ふれ也。人々おめらるるんとて。己が心を勞するハ。智慧ありとゆふべし。歌ふ  
○ 恐爰地獄の咄しきくよりも。唯借錢と米びつの音  
○ 世の中ハ心やせふを志すとも。世がなくては。激らるる世  
○ 叔人の樂しハ。毎量志すとも。悪を樂む者ハ多く善を樂む者ハ。至て少あり。詩歌を樂む者ハ多く。経流を樂む者ハ至る少し。風流を樂む者ハ多く。閑雅を樂む者ハ。あし。危きを樂む者ハ多く。あきを樂む者ハ至て少あり。其  
○ 又謙の樂といハ。心は掛る雲もなく。子孫孝順と志す。家又大柄なく







涯あやさとらざるもふ智ちといふべし。過あやまてバ改あらたむるに。憚おそる事ことあき者を。其そのあやほりを志しり川が。負まけ惜おて。理りを非ひ曲まげてけしからぬ名なを求もとむ。何なにやまりの上うへの大おほ物ものやまりなり。今いま世よ間かんをえるよ。かやうの人ひと多おほし。昔むかしハ表おもて店だなよて。誰たれ殿どのといひきし人ひとぞ。若わかい時ときの放ほう蕩とうはよりて。今いまハ九く尺せきの裏うら店だな又また居ゐる人ひと多おほし。笑せう止し千せん万まん也なり。こまハ先せん人じんの耻ちを何なにらハいて。後あと人ひとのいまま志しめとむる者也なり。若わかい衆しゆう。かやうの何なにやまりあきやう又またむべし。年とし寄よりておら。千せん万まん後あと悔くわいむれむ。かへりがたし。其事ことを始はじめよりよく志しりて。慎しんむが利り根こん發はつ明めいといふ者也なり。惡あく事こと戒かい慎しんむ。何なに

かどの安心あんしん福徳ふくとくり志しまかたし。何なにても身みをよよくおさめ。家業かごうを出だ精しやう志して。儉約けんやくを守まもり。そろくと暮くらむかど。よき事ことハあきと志しるべし。世界せかい大だい上じやう吉きちの樂たのみあり。樂たのみといふ者ものハ。求もとめて樂たのむ者もの又また何なにらず。勤とむへき事ことを。よくつとめて。無事むじよくらすを。謙けんの樂たのみといふ。樂たのみを求もとめて樂たのむ者ものハ。真ま又また苦くむが志しると志しるべし。是こゝ樂たのみといふ。○古こ人じんの云いふ。誠まことの善人ぜんじんといふハ。他たの善ぜんをやぶらす。已おのまが徳とくを何なにらむといふ。衆人しゆうじん又また順したがひて。他たの過とがを説とく。一切いっけつの樂たのみ又また著ちやくせむ。名譽なごうを求もとめむ。道徳だうとくを樂たのみて。自業じごう法はふ



淨也。仁心何理て。衆生をあやまさば。心又実法を貴んで。何やあき法を信せず。唯正直を好んで他の誑惑以積ず。かくのごときの人を誠の智者善人といへり一切の人かやうの心つけよありむひ

○孔子曰。簋食をくらひ。水を飲肘を曲て是を枕とす。樂も又其中又何り。不義もあて富。且貴きハ。我も於て浮雲のごとく。かやう又心ほてくらむ。陸の樂も也。不義もあて富。且貴きハ樂も又何らず。直も苦もが来るなり。況や邪智をめぐら。人の金銀をむさがり。淫酒等の悪事を考て。樂もと思ふ者ハ。昔も

ハ来る筈とあるべし

○非義非道あて滔たる金銀ハ。うかべる雲のごとくなり。る

○樂もハ。夕顔棚の下涼も。男ハて。ら。女ハ二布考て秋

の登りも豊か。益ハ終日。田圃の中又いとあき者も。

日の没も家よかへり。夫婦浴洗考て。取もつくろハ。夕

涼も考て。心又思ふもあ。あ心もくらすハ。いりまた

のーからんと思はる

○蝙蝠先生の家訓心得草上。昔一人の百姓あり

身のおどを考り。毎るを樂む。此仁稿の席を敷。身

又何らき布を着て。雑穀を食とす。夫とハ田畠をよく



耕作<sup>くわさく</sup>。妻<sup>つま</sup>ハ少<sup>すく</sup>一の余<sup>あま</sup>カ<sup>も</sup>も彷彿<sup>ふふ</sup>をたをおり。春<sup>はる</sup>より冬<sup>ふゆ</sup>あゑる迄<sup>まで</sup>。朝<sup>あさ</sup>より晚<sup>ゆふ</sup>迄<sup>まで</sup>。少<sup>すく</sup>一の樂<sup>らく</sup>あり。妻<sup>つま</sup>がいよく。是<sup>こゝ</sup>を幸福<sup>しゆふ</sup>といふ。誰<sup>たれ</sup>も幸福<sup>しゆふ</sup>あらんとつて。打<sup>うち</sup>笑<sup>わら</sup>へて夫<sup>おつ</sup>とがいよく。扱<sup>さて</sup>く汝<sup>なん</sup>トハ并<sup>なま</sup>へあき者<sup>もの</sup>あり。汝<sup>なん</sup>がゆふ所<sup>ところ</sup>ハ。貴<sup>き</sup>人<sup>にん</sup>上<sup>じやう</sup>くの人の事<sup>こと</sup>を見る如<sup>ごと</sup>也<sup>なり</sup>。家<sup>いへ</sup>等<sup>ら</sup>ハ元<sup>もと</sup>か下<sup>げ</sup>賤<sup>せん</sup>めふと志<sup>して</sup>て。下<sup>げ</sup>賤<sup>せん</sup>の家<sup>いへ</sup>又<sup>また</sup>居<sup>お</sup>り。下<sup>げ</sup>賤<sup>せん</sup>の衣服<sup>いふく</sup>を着<sup>き</sup>て。下<sup>げ</sup>賤<sup>せん</sup>の食<sup>しょく</sup>を食<sup>た</sup>ふ。下<sup>げ</sup>賤<sup>せん</sup>の業<sup>わざ</sup>をいとあむハ。天<sup>てん</sup>理<sup>り</sup>の常<sup>じやう</sup>也<sup>なり</sup>。好<sup>この</sup>むあきと志<sup>して</sup>かすと思<sup>おも</sup>ひて。ふ意<sup>い</sup>の幸<sup>さい</sup>ひを歎<sup>なげ</sup>ハず。身<sup>み</sup>又<sup>また</sup>病<sup>やま</sup>ひあふ家<sup>いへ</sup>又<sup>また</sup>禍<sup>わざはひ</sup>ひあふ。達<sup>たつ</sup>者<sup>もの</sup>又<sup>また</sup>志<sup>して</sup>。いとまあきハ。是<sup>こゝ</sup>幸福<sup>しゆふ</sup>也<sup>なり</sup>といへり。百姓<sup>ひやくしやう</sup>又<sup>また</sup>ハまれあふ心得<sup>こころえ</sup>あり。世<sup>よ</sup>間<sup>ま</sup>の人<sup>ひと</sup>。此<sup>こゝ</sup>百姓<sup>ひやくしやう</sup>の心<sup>こころ</sup>何<sup>なに</sup>

らハ。各<sup>おの</sup>々<sup>おの</sup>其<sup>その</sup>生<sup>せい</sup>理<sup>り</sup>又<sup>また</sup>安<sup>やす</sup>んて。分<sup>ぶん</sup>外<sup>がい</sup>の事<sup>こと</sup>を願<sup>ねが</sup>ハぬ。天<sup>てん</sup>の所<sup>ところ</sup>心<sup>こころ</sup>又<sup>また</sup>叶<sup>かな</sup>ひて。行<sup>ゆく</sup>末<sup>すえ</sup>目<sup>め</sup>出<sup>で</sup>なかるべし。堯<sup>ぎやう</sup>舜<sup>しゆん</sup>の民<sup>たみ</sup>も此<sup>こゝ</sup>外<sup>がい</sup>ハ何<sup>なに</sup>るべらずとあり。成<sup>あ</sup>ほど多<sup>おほ</sup>のちとを志<sup>して</sup>り。毎<sup>まい</sup>事<sup>こと</sup>を樂<sup>たの</sup>むといふ人<sup>ひと</sup>あるべし歌<sup>うた</sup>又<sup>また</sup>

○足<sup>あ</sup>事<sup>こと</sup>成<sup>あ</sup>りて分<sup>ぶん</sup>限<sup>げん</sup>又<sup>また</sup>安<sup>やす</sup>んせむ。貪<sup>ひん</sup>賤<sup>せん</sup>とてむ常<sup>じやう</sup>又<sup>また</sup>あらく

○又<sup>また</sup>國<sup>くに</sup>を治<sup>ち</sup>め家<sup>いへ</sup>を齊<sup>せい</sup>へ。子<sup>こ</sup>弟<sup>てい</sup>又<sup>また</sup>教<sup>か</sup>へを志<sup>して</sup>り。徳<sup>とく</sup>を養<sup>やう</sup>ふ者<sup>もの</sup>の樂<sup>たの</sup>む。又<sup>また</sup>かくのごとく。是<sup>こゝ</sup>ハ極<sup>ごく</sup>く大<sup>だい</sup>上<sup>じやう</sup>の樂<sup>たの</sup>む也<sup>なり</sup>。寡<sup>くわ</sup>欲<sup>よく</sup>又<sup>また</sup>志<sup>して</sup>て。仁<sup>に</sup>義<sup>ぎ</sup>忠<sup>ちゆう</sup>孝<sup>かう</sup>の善<sup>ぜん</sup>を行<sup>い</sup>ふへとむ。忘<sup>わす</sup>れたるがごとく。恩<sup>おん</sup>を施<sup>せ</sup>こせむかへり見<sup>み</sup>ず。人<sup>ひと</sup>志<sup>して</sup>らざむ。憤<sup>いん</sup>らむ。名<sup>な</sup>の聞<sup>き</sup>へざるを恨<sup>うら</sup>むとせむ。俟<sup>まち</sup>りあきて来る<sup>くる</sup>事<sup>こと</sup>何<sup>なに</sup>り。樂<sup>たの</sup>む者<sup>もの</sup>は



ず考て樂く多し。此道理ハ極くの上智ハ何らさきも。  
行ふいがたし愚者ハ考きかたし。然るに智恵をみぎこ  
此道理をよく考りて。善を行ふ。誠の樂くを致すべし。  
是世界第一の富貴上くの人也

○叔人間ハ。爰又住たい。かこ住たい。こよいよい家は居  
りたいと。思ふハ無理也。こよいの衣物が着たい。こよい道  
具がかしい。うまい物がくいたいと。あまり小言をいふ。道  
からむ何まり不足の心を起すべからず。我身をかへり  
見て。足るを考り。安心よくらまべし。どふで此世ハ空しく  
叶ふぬが。昔もたへ娘と考るべし。何事も因縁いふき何事

也。何やうの不仕合は逢ふ。心をかへぬ。唯善心を以て。  
善事致す。くらふを。追々福德も来り。安心の田  
地又至る也。何ても吉凶禍福。心をかへるやうな事  
あてハ。昔の悪事致滅し。災難を切ぬけて。福德安  
心の場所へ出る事ハ出来がたし。こまよめて。吉凶禍  
福をかへり見ぬ。善心を以て。善事を致す。身をよく  
おさめ。家業を出精考て。儉約を守り。身分より内端  
よくらふを。終つて福德安心の田地又至る事。疑ひか  
○家語一六君子禍ひ至て。懼きず。福至て喜ぶすと。此  
心ハ大入用也。智者ハ此所ハ心を落付て。吉凶禍福を



かへり見ん。唯一いつぱ向むか善事を志す也。毎おの能上人の正歌よ  
 ○うきつらき脱とひ恨うらみ樂たのむよ。心あためぞ夢あめの世よの中ちら  
 ○我心とき世の松まつは似にたりきり。世のよよ一いつ色いろ成なりかへ福ふくハ  
 世の中よのよよ一いつああ一いつよ。色いろをかへるやう事こと又またハ。殊ことのよ  
 い智者善者とハいひがたい。悪事あくじ災難さいなんを切きりぬけて。福  
 徳安心とくあんしんの田地でんぢ又また到いたりかたい。是こゝよよ引ひて吉凶禍福きくふを  
 かへりぞん。唯ただ一いつ筋すぢは善事を志すべい。善ぜんするさへ志こゝきバ。  
 福徳あんに頼たのむずいて来きる。又また現世げんぜ未な来きはよ。怨おそろ愛あ  
 るあり。は故ゆゑハ聖人せいじん智者ちやうハ。唯ただ善ぜんするを志こゝて。是こゝを樂たのむ  
 といして。安心あんしんハ世よを送おくりむ。何なん里りかたいき所ところ心こゝあり。一切

の万民是を学まなぶべい。仕合あは不仕合あはをいいて居ゐてハ。よい  
 善事ぜんじハ出来できがたい。仕合あはがよいから。家業かごうをつとめ。仁義じんぎ  
 禮れいの善事ぜんじを行なふ。仕合あはがよいから。善事ぜんじハ仁義じんぎ礼れいも。  
 家業かごうも。やめるといへい。不仕合あは計かり續つた時ときハ。善ぜんするの仁  
 義じんぎ禮れいも。身みをおさむるも。家業かごうもやめて。仕廻まはれを志こゝ  
 らぬ。夫これでハ弥ひく福徳安心とくあんしんの来きる期きあり。ここきよよよつ  
 て。吉凶禍福きくふ又またかほいずと。何なんでも。身みをよよおさめ。家  
 業かごうを出だ精せい。仁義禮じんぎれいの善ぜんするを行なふ人ひとであいてを。  
 よい人ひとといひがたい。善ぜんするを行なふ人ひとハ。福徳安心とくあんしんが来き  
 るあり。身みをおさめむ。家業かごう不精ふせい又また志こゝて。仁義礼じんぎれいの善ぜん



事を行ふハざる人ハ。貧乏ひんぼうあんぎぐくい付也。是を佛  
 神天道の所定也。是よよりて。善事をせしむ。福德安  
 心の来る道みちふ。あるふ仕合しあひが續つくとて。善ぜんすること成  
 ぬめてを。孫まごく不仕合しあひとある。こまよよりて。聖人智者方  
 ハ。吉凶禍福きこくわふくあかまはずと。出精しゅしやう志して。善事をつとめぬ。  
 終つひハ悪事あくじ災難さいなんハ滅めつして。福德安心ふくどくあんしんをかりを以もつて  
 此故こゝ又人ひと又貴たかまきこと也。孟子まうじも憂患ゆうげんは生なまて。安樂あんらくは  
 死しとると作かせらきたり。此心こゝろハ苦患くげんをおとる者ものハ。安樂  
 を以もつて。安樂あんらくをする者ものハ。死しとることの苦く勞らうをおとる者ものハ。安樂  
 事也。張子ちやうしがい曰いく。貧賤ひんけん憂戚ゆうせきハ汝なんぢをなす成なりと。此心こゝろハ貧

乏ひんあんぎとるよよりて。道を守りよき人とありて。終  
 又福德安心ふくどくあんしんを以もつてとあり。いづまあんぎ苦勞くらうをおとる。吉  
 事ことハ来きらぬとあるべし。苦くハ樂らくの本もと。樂らくハ苦くの本もとといふ  
 事を。志しかと考かりて。難儀なんぎ苦勞くらうを致いたすべし  
 ○手鴻てこう宗義そうぎの塵計ちんけい也。老人らうじんの云いく。皆人みなひとが世話せわ苦勞くらうと  
 いふ事を。いと嫌きらひて。道みちをおとる者もの也。元来もとより其世  
 話せわ苦勞くらうといふ者ものハ。いふ成物なりものぞといふ也。家業けがふを勤とめ。主  
 人しゅじん又忠義ちゅうぎをおとる。親おや又孝行きやうぎやうを致いたす。或あるハ兄弟けいだい親類しんるい家  
 業けがふを取立とる人の為ため身みの為ため又ある事を。勤とむるを嫌きらふ  
 也。是等こゝろをおとる人ひとハ。立身りっしん出世しゅっせ又また金かねをおとる人ひとと見



まむ。さハあく考て。已きグ身を急たり。歡樂を恣又  
 せんといふ。心より起りたる事也。其歡樂といハ苦行  
 を考て世話の中より出たる者也。いつき難行苦行せ  
 祿を。福德快樂あり。然るも已きせ祿をあらぬ家業  
 をせぬ。苦勞をせず考て。已きグ好みお見拵山。歡樂  
 をかりを。考てか。者ハ。無智の横道者又考て。身をそ  
 こあふ悪人也。此事残よく考つて。身をよくおさめ。苦  
 勞を考て。家業をよくつとめ。仁義礼を行ひ。大福德  
 大安心の人とあるべし。一休の歌又  
 ○働いて金銭もあけて蔵立て。又をたらき人やらふ身よあま

○ぬき糸といふ書。一切の苦勞。心せひを伏山又考て。た  
 のあき事ハせぬ苦と。覺悟有りたく。左様又心ゆへあま  
 存知の外たのあき事も出来て。苦勞も心せひも。思ひの  
 外。少あくある者也。苦勞心せひと申事ハ。人間ハ。せず  
 考てハ叶ハざる事也。心せひをせ祿を。用事ハ。整ひがた  
 せ祿をあらぬ心せひを致す時ハ。却て安心の本よ考  
 て。氣血もよくめぐり。身の養生法あり。せ祿をあらぬ  
 心せひを屯るから。祿ハ福德安心が来る也。是又よつて。  
 人々苦勞心せひを好みて致すべし。苦ハ樂の本と  
 いふハ。爰の事也。又苦勞心せひを屯る故也。氣も屯



がきて。病やまひとあるといふ人あり。夫ハ苦勞心をひの  
 訳わけをあらぬ人のいふ事也。心をひといふ名ハ同一事か  
 き也。全ぜん躰たいハ違ちがひ。苦勞心をひをする故也。病ひとある  
 といふハ。世祿せりやくをあらぬ。苦勞心をひをせず志て。捨置すておて。  
 災さいひの起おりたる時の。苦勞心をひハ病ひとあり。此時  
 小ハ。苦ハ樂の本もととハ。いひがたし。小苦せうくが大苦たいくとあり  
 て。終つひハ病ひとある也。是を苦をたまたむ。氣きむを不  
 きて。病ひとあるといふ也。世祿をあらぬ事をせむ  
 居ゐる人ハ。益智えきちの生皮あまくわし者也。已おまが世祿をあらぬ  
 が何なにる也。夫をせず居ゐる人ハ。終つひハ小苦せうく大苦たいくと

あり。小損せうそん大損たいそんとあつて。貪ひん苦くとせめらま。病ひとあ  
 りて。早死せうしとあるあり。是を苦勞志た故也。病氣とあつて。  
 妖死ようしを志たといふ。又世祿をあらぬ。苦勞心をひをす  
 るを。大苦たいくが小苦せうくとあり。大損たいそんが小損せうそんとありて後のちは  
 ハ大福德たいふとくを有ある人也。已おまが世祿をあらぬ事をせむ  
 也。何事なにごとも。損失そんしつなき故也。段だんくと福德ふとくを来きて。安樂あんらくと  
 あるなり。天道てんたうハ已おまが勤つとむべき事を。よくつとむる人  
 也。幸さいひを興おこへず。天道てんたうハ已おまが志しべぬ事をせず居ゐる  
 生皮あまくわし者ものハ。禍わざはひひを興おこへず。是天道てんたうの賞罰しょうばつと志て。人  
 間の私ひたしは何なにらぬ。善事ぜんじといへども。苦勞くろうあんぎ。辛抱しんぱうせ



祿を出来ぬ者也。是より明て已まが止べき苦の仕事  
 や。苦勞心をひひ。好んで致すべし。亦ハ富貴繁昌の人  
 とある事。疑ひあり。人々此理をよく知りて。已まがあは  
 ぬき苦の苦勞ハ。急度つとむべしとあり。此塵計ぬき  
 糸の道理を。よく知りて。已まがせ祿をあらぬ苦勞心を  
 ひひ。急度致すべし。是を致さぬは於てハ。小苦が大苦と  
 あり。小災せうさいひが大災たいさいひとあり。小損が大損とある此道理  
 を深く知りて。大苦が小苦とあるやう。大災ひが小災ひ  
 とあるやう。大損が小損とあるやう。早くから。其用  
 意をべし。然るは其用意を怠る人。至て少あり。皆

人が大災ひはあつてから。始末よかる故。其利益を  
 唯皆人が苦勞心をひひをかりを。苦勞よきて。日々あげき  
 かあきて。くらせども。甚苦勞災ひを。工夫志て早く取お  
 き片付る事を志らず。愚鈍といふべし。又せずはよき苦  
 勞心をひひを怠る人あり。是等ハ。人の頭痛或は已まが病と  
 いふ者よきて。論よも算よもかりぬ。狼狽者也。何卒苦  
 勞心をひひ。人の為ならず。皆我身の為と心得て。すま  
 む。何より苦勞心をひひ。苦よあらぬ道理也。亦らばせ祿  
 ばあらぬ苦勞ハ。急度致すべし。此道理ハ。大方の人か志か  
 と志らず。夫故又苦勞心をひひ。ひどくいやがりて。せ祿



尤るらぬ。苦勞をせず。捨おいて。大苦勞となりて。大  
 損を走るなり。此教へおよつて。世祿をあらぬ。苦勞を  
 走るがよーといふるが。よく志せたり。あまかきき益  
 へあり。苦勞も。心をひも。我身の安心。福德の為と見え  
 苦勞も。心をひも。苦もせせりて。よくつとむるから。大ひ  
 ん。つとめよー。こきよよ門て。よき教へハ。交祿をあら  
 ぬとあるべー。よき教へを受さまを。苦勞を志て。損を  
 走るあり。是等の儀をよく心得て。福德安心を以て  
 ふべー。義賢行者の歌よ  
 ○皆人ハ。樂を願ひて。苦も沈む。我ハ苦を志て。樂も入哉

と。此歌の心は相違ふ。いつき苦をせ祿ハ。樂ハ出まが  
 たり。は義をよく悟りて。世祿をあらぬ。苦勞をよく勤む  
 べー。後ハ福德安心の来るは留遠あり。此ぬき糸の事  
 を。志かと心ゆふべー。くりかへーよんで。我物よすべー。  
 人々苦もむ事をいやかつて。志ふ志たりよかるふ。こふ  
 志らよかるふと。唯らくする事を好む故ふ。主人より  
 とゆき。親も氣苦勞をさせ。朋友も見さけらきて。今迄  
 の樂もさへ。段くとあくなつて。いやがる苦も。段くと増  
 ーかさありて。人間仲間ををづきて。そんなら。わらの上  
 のおきふーも。日本までハ是をこむかむりといふ。親兄弟



一家一門の顔よごりあるへし。夫よりハ苦を苦よせぬ。修行を心がけたき者也。たとへていをも。水を怨き。海川をこハかるよりハ。およぎあまさをへすまを。其水があくさよふある者也。馬杯又乗るよ。少くせの何る馬ハ。恐る心が何ると。一入荒立者也。其くせ馬を慰く又思ふ程よ。よくのる者又ハ。馬志づまりて日以のくせも出さぬ者あり。却て馬が恐きて。乗人の心の候又あるなり。馬を恐る、あら。一入あきて修行さへすまを。いつとなく恐る事だ。樂くとある者也。一切の修行も。皆かくのごとし。苦うをあきたくた。苦むべし。人々此心を味何ふべし。

馬ハ乗事の上手あ人と。下手あ人と。よく知て居て。下手あ者うそむへよるとあきてのせぬやうな是る。又上手あ者が。そをへより乗あ。何かどの何ま馬ても。乗人の心の候又あるとなり。又主人をよく志つて。のせるとのり

○或人のいとし。福者よハおごりといふ事ハあまき。貧乏人ハ。何れおおるおあき故よ。おごりあといふ。成かとおごる物ハあけまき。家業不精又志て。身分より。うまい物をたべ。身分より。よき衣服を着身分より。物見遊山を好む。是貧乏人のおごりあり。何でも自分の家業を。よく勤め



此。身分過たる事残するハ。皆おごりあり。身分より扣  
 へめ又屯るハ。皆儉約を守るといふ者あり。貧者を見る  
 小。食物でも。着物でも。何てもかたむ。皆身分より過てあま  
 む。皆おごり也。又生皮不精又老て。せ福をあらぬ仕事か  
 何るハ。夫をせず又拙んで居る貧乏屯る苦あり。すべき  
 事残せざきむ。貴賤上下共。貧乏屯る苦也。一切の福  
 徳ハ。家業をつとむるより。漏出る老也。歌又  
 ○何よりも家業大車をつとむべし。方りの室。こきよりぞとく  
 と。是又相遠あり。貴賤上下共。家業を出精せざんを金  
 錢米穀室の漏出る種あり。此儀を皆く寫と兼知むべ

一。然る又貧乏人ハ。生皮不精又老て。たましく金銭のそい  
 る事ゆきむ。後の用意ハいせせず老て。くい物着物等も奢  
 リ。直又なくするなり。何ぞ不時の災難の何る時ハい  
 大にまりを老て。取をかくあり。智者福者ハ後の用意を  
 よくする故也。不時の災難何うても物まりこまらず  
 又。何ゆ損のあきやうも屯るから老て。自然に福徳を  
 得るなり。毎智の貧乏人ハ。後の用意あり。何きにあ  
 り切又老ひあくするあり。凶年飢饉病氣等の不時の  
 災難ハ防さがたし。此故あいつ迄も貧乏あり。何てか身  
 分より。過たる事ハ。皆おごりあり。都て貧者ハ。已まら



身分よりおごりて居るを知らずして。我等ハ毎年毎  
 日。貧乏あんざきて。くらすよ。福者ハ行住坐卧奢りを  
 極めて暮し。くらすよ。くらすよ。福者ハ歸て奢らず。儉約を  
 大ひあるる遠ひハある。福者ハ歸て奢らず。儉約を  
 くらすあり。物見遊山芝居開帳参り等も。我れよ出  
 かけ也。折を見。時節を待て出かけるあり。貧乏人の  
 よ。思ひ出十次才よハ。致さぬ也。身分よりおごり。家業よ  
 こたる老ハ。福者よハあるらぬ也。常よ身分よりおごら  
 ぬ。儉約を志して暮す也。何かと大身体ても。家業不精  
 志て。身分よりおごりてハ直よ貧窮とあるなり。此故

よ。身分よりおごる事ある。家業を必精志て。つとむる  
 也。又貧乏人ハ。却て身分よりおごり。又家業も怠たるな  
 り。貧者の奢りハ。家業不精志て。世祐を知らぬ仕事  
 あるよ。夫をせむは。拙んで居るあり。是を貧者のおこ  
 りといふ。又公儀の役をつとむる衆。高位高官の所衆。相  
 應よくらすよ。衆ハ皆。今日ハ風雨をけし。つとむる  
 もありがたし。又晴天美日あるとて。花見遊山杯よ。潜  
 行。おかくこと叶ひがたし。中々心の儀。自由よハありがたし。  
 是家業も怠たりあり。此故ハ福德あり。又家宅衣服  
 るも。大伴定りあるを。身分よりおごりるなり。此故



福德有り。又下賤貧者ハ。家業も怠たり。身分よりお  
 ぐる故也。貧乏なる也。貧者の奢りといふハ。長閑ある日  
 也。せ福をあらぬ仕事がある也。夫を捨置いて。花見北山淨  
 瑠璃手つま吹一象見せ物等へ由きて拵ひ。少く小をさ  
 へ阿まむ。明日のたくまへむ。かまらば又出かける。又心  
 みるあきを。後世の為といひて。勸化開帳杯の世話人と  
 ありて。ひま残つ甲。為べき事を為さば。為べきか  
 らざる事をあすハ。是を愚中の愚といふ。又雪霜霖雨杯  
 の時ハ。家業を廢きて。内も居て。日を空しく。儲ける  
 財をもあけむ。却てついやむ。遠人の遠ひ。色分の損あり。又

暮將暮一日をくらす人有り。貧者町家杯ハ。變じて近付  
 べからず。大い小家業の障りとあるあり。此故の清土人  
 也。本野狐といへり。宜あるかあよく人を誑らかは事何  
 り。又徒然草もハ。暮將暮心をはいる者ハ。其罪五逆  
 あまざるも有り。此道理も何るべし  
 ○暮將暮也。志らぬハ。老りて後。家職の邪魔又せぬ程は  
 ○盤上をさのまはるものも。うつつけ者人の志も。又折後ハ。い  
 是ハ時頼公の歌といふ。又盤上の石の置やう。駒のまき  
 道も知らぬハ。毎下又拙あき事あきを。少くハ老りたる



りよき也。又盤上ハ。隱居の日暮。誹謗ハ寢覺の伽といふ事也。いづきもよろあま随ふべし。

○甘い物ふて抱ひと其かきり。まはく見ずまけまはるなり

○おこりたり。抱んだりあま。あかへしあんぎあ年の尻がら存り

○おのが身をおのがせむると。さるこそ覺く此内の悟りなりを

○身の料をおのが心よ。あらまてハ。罪もむくひも。いかにがまん

○つとむべし。家業ハ天の役目あり天をむけ。身をあらぶし

○色々の教ハ何きど。悪をやめ。善をたふるより。外道か

是等の歌を。能く心わて。家業を出精し。おこりをやめて

儉約を守り。一生を福德安心よ。ふらすべし。

○夢想兵衛後編一。一年の謀計ハ。元日からせ初む。ま

又何はず。老後の謀計ハ。各々若い時又何き後。夫を迂遠

とてせず。貧者のくせと考て。明日取錢を。今日からつうへ

を。若る違ひたる時ハ。其出野あけきを。明日の飯米小せひ

ハ借金也。毎智生皮者あきを。今日取錢も取らず。明日取

錢ハる遠ひて。夏の日の晴天よりも。頼るかた。風が

ハきを。宛あらず。いと金錢の遣らぬ先又出す時ハ。

其足ざる事知きて有り。足ざるをあらいつ。足ざるを苦は

するハ。足事成知らぬ迷ひ也。夫き年又豊凶有り。人は幸

不幸有り。盛ある者ハ。必ずおとろへ。盈る時ハ必ず虧く。



三里の城。七里の郭是をめぐりて。せむきたかたず。彼四方は敵を受て。猶勝事を謀る者ハ。士卒の心を一致し志て。兵糧乏しからざるよよる。ふるは貪家の風俗を見らる。家内の者。日ましくよ志て。亭主の軍配行届かた。父子夫婦は好謙ひ有り。多く朝飯ハ三度は終りて。夕飯ハ四度も。五度もたべる者有り。活業ハ怠たりて。精出す者なく。物見拉山碁將棋あんど。身をいきて。家の為。骨折者なし。看すく取まる金銀有りても。今日ハ雨かふるからといふて休む。けふハ雪が降からといふて。幾日かいです。家又三日の野へあけまは。夫もか

まじす。唯生皮不氣根。物くさあ志て。抱ひすきあり。こまよもりて。貪乏といふ。大敵は押寄らま。妻子ハ何ごを釣し上らま。落城は及べま。外は援兵もなく。子を賣り。妻を捨る者有り。ふるまは身の怠たりま。露思ま。極く泰平の時代は生ま。大都會のよい場は住あから。騷からぬの。時節がまるいの。隙まやのと。身勝手な懐計りをいふ。此同類世間は多き故。皆尤と聞て時節を恨む。時代を恨むあり。已まき怠たり。仕方のまろきを知らず唯世の中と。時節とを恨む人多し。無智といふべし。今かゝる泰平の時代は生きて。身の幸ひハ夢



よもあらず。不足たらくはくらすは。いりある愚鈍小  
人ぞや。罰何たり。の貧乏性あるべし。今ハ堯舜の民  
る事を。脱ぶべき事あるよ。桀紂の暴虐よ。逢ふごとく  
よ思ふハ。大ひある何やまり也。人せめざらば。家を失  
ひ。貞女の不義あらぬつまを捨実体よ志て。不孝あ  
らぬ子造よ。難儀をかけるハ。人間の耻辱。此上ハ何  
べからず。此恥辱ハ何より起るといふよ。毎智よ志て。足  
事然志らざるより来る又雨の日雪の日。又平生也よ。  
活業よ怠たり。生皮不氣根より起る事也。省すくま  
入金銭を彼是と怠たりて其圖をなす極也又見せ

よ。百金貳百金千兩二千兩が物何り也。我奉金ふ  
しよ。皆問屋の物あきだ。利分薄し。又一ツる遠ひ  
あきを身緒ハ粉微塵とあるべし。至て何やりき身  
上あり。又よくかせく人おらむ。纏の元手金でも。問屋  
ハ現金よ仕切恰好物で。あきまをか己す。問屋も。又よ  
き物を。急りだしてのけ置也。よき物を安く買て。  
又安くうるあり。うり物が安き故よ。大勢買よ来て。  
大繁昌也。此故又時節が己るいの。人氣が己るいのとい  
ふ。おんのおふしよ。安心よ世をくらすあり。かむかり  
の道理よくらまは。一生貧乏神よせめらきて。一生天



窓の上あかる時節ときせふふ。愚鈍ぐどんといふべし。何卒なほ身をよくお  
 さめ。家業かごうを出精しゅせい志して。安心あんしんは世よを送おくるべし。人間の衣い  
 食住しょくじゆは。一日いちにちもかけがたし。若わ衣食住いしょくじゆをけまじ。犬猫いぬねこ同  
 前まへあり。乞こ食宿しょくどあり。お志して。人間の交まじり又また何なにらさず。こ  
 き又また依よて。身をよく治おさめ。家業かごうを出精しゅせいし。足事たりを知しり  
 て。くらさ祿ろくをふらぬと志しるべし。たとひ福德ふくとくありて。我わ  
 一生いっせい。是この家の居ゐらまゐる。こまふとの食しょくいたべても  
 よし。是このどの衣服いふくハ着きても。さらまゐるといふ人ひとでも。二  
 段だんも三段さんだんも引ひかりて。くらさバ。衣食住いしょくじゆの三さんつ又また何なにまり  
 苦勞くろうハふき者也なり。是こよつて。身みのおどを志しり。足事たりを

ありて。身みふより三分さんぶん一いち。下したの方かたを通とおるべし。左ひだり屯とん志し  
 せ。世よの中なかを安心あんしんよくくら屯とんあり。人間にんげん日ひづりみ十年じゅうねんと。か  
 ろく見て。身みをおさめせ。家業かごうも出精しゅせいせず志して。大晦日おほみそひ  
 の勘定かんじやうがあはず。身上みづかみのまよりり。見るい俵はらは。横車よこぐるまを  
 挽ひて。女房にようぼうの言葉ことば質ちぢをおく杯さか志して。夫婦ふうふけんら見みする  
 やうな事こと何なにり。弥やく身上みづかみの見るくある瑞相さいさう也なり。世間いっせかい一いつ体たい  
 かや此こ人多おほし。己おのれまが心こころのおこたり。家業かごう不精ふせいより。妻つま  
 子こ逆さかし。難儀なんぎをかけ。苦勞くろうをかけるあり。大悪おほあくといふべ  
 し。何卒なほ雨あめの日ひ雪ゆきの日ひも。家業かごう出精しゅせいして。身みか相應おこたのふ  
 らしを致いたすべし。是こを安樂あんらく也なり。世よをくらす人ひとといふべ



○身の上よ。浮沈うきまわ之ある世の習ひんひ貧ひんある時不辛抱ふしんぱうをせよ  
 此歌をよく心持こころもちふべし。富貴ふきなきを。道みちを行おこなひ義理ぎりを  
 つとめ。正直ちやうじきよあるけきども。貧乏ひんぱふよあると。道みちよ遠たうひ。  
 義理ぎりをそこらひ。正直ちやうじきを失うふ。又また親子おやこ兄弟けいだい郷黨きやうとう隣里りんり  
 むつままからず。孟子まうし曰い恒こゝろの産うふけきハ。恒こゝろの心こゝろあり。  
 放僻ほうへき邪侈じあ多おほしと。仰おほせららきたり。是こゝろよ違まちふし。然しかも  
 此君子こゝろハいかやうの事ことあり。義理ぎりよよつて。動うごくは  
 是こゝろを君子こゝろ此操こゝろといふ。常人ふじんハ爰こゝろよ於おて。平生へいぜいの志こゝろを失う  
 ふ。是こゝろよよつて。小人こじん愚者ぐしやと笑わらハる。義理ぎりの重おもき事ことを

あるべし。叔貪賤しやくひんけんなきを。貧賤ひんけんかどの義理ぎり何なにるべし。仕  
 合あのよきも。何なにしきも。我われかよ安んやすんんトとくらすべし。  
 是善人ぜんじんあり  
 ○金銀きんぎんのおしきといふ。ニッあり。娼酒しやうしゆを事ことといふ。奢おご  
 り放かいままよせんため。金銀きんぎんをおしかる者ものあり。是ハ実じつ  
 也。金銀きんぎんのおしきといふ。ふハ何なにんん以も唯ただ金銀きんぎんを水みづの如ごとく  
 又またきつひ捨すんと。願ねがふのもあり。かる白物しろもの者ものハ百金ひやくきんを  
 得うる時ときハ。卽すなはち百金ひやくきんをきつひ捨す子金こゝろを得る時ときハ。万金まんきんをき  
 ひ失うふべし。ゆへいりんとあきまむ。百金ひやくきんハ我手われて又また何なにり。是こゝろを  
 失うひて猶なほたらず。別べつよ百金ひやくきんをかりて。是こゝろをきつひ失うふ。爰こゝろを



以て。百金を得る時ハ二百金を失ふ。千金を得る時ハ  
万金を失ふ。是ハむだに金銀をきひ捨る事を樂之と  
せる人あり。亦ハ乞食とある人也。又千兩の分散とせる  
者ハ。百兩の家也。百兩の分散とせる者ハ。十兩の元金  
也。十兩百をかり。千兩万をかる人なり。其たらざる事を志  
るべし。かやうある人世間多し。何とゆふ心りおれがた  
し。能く家を失ひ乞食とありたき人と見へたり。此故  
に。入用を料らずして。いたま老ハ。君子ハ與せず  
○又無性は貪欲を。かハく輩ハ。糠をくらひ。垢を越て  
義理を忘る。其行ふ道ハ叶ハざる故也。貧しからば

といへば。富を致すふたらず。炭の粉をためて。炭團を  
造り俵をかどきて。銭緡を綯。煮豆をくへ。袖口がき  
きるとして。飯をかきまぜて。たべる杯するやうな。さる志  
い料簡てハ一生仕出す事ならず。是も又金錢をかり  
いと思ふのよみて。大ひは殖す事を知らざり。実は無  
智の中あり。然るに。放蕩無頼の輩が。人の物を取り  
て。をひ。人の物をかりて。かへさるよ。くらぶまむ。大ひ  
よよろし。雲泥の遠ひあり。炭の粉をためて。炭團を作  
り。大目らをかどいて。銭ぎをある人よりハ。大ひよよろ  
し。大方の人ハ。布俵の金銀の。あけやうを志らさむ。



俵たたらをおどいて。錢指せんさしをあひ。湯飯おゆいのさいよ。醬油しょうゆを  
 あめる位ちかりよきあり。己色おのこをつめて。人ひとは損そんをかけ  
 ぬ人ひとあまむ。大おほひよよろし。又身みのおどをあらばあ  
 て。金銀きんぎんをきひ。人の物をかりて。放蕩ほうとうをる人ひとハ誠まことの悪  
 人ひとあり。家業かごうよ怠おこたりて。身上みづか残のこるくす者ものハ。世界  
 第一だいいちの馬鹿ばか者ものなり。身上みづかをこるくする者ものハ。一切いっけつの  
 悪事あくじ是こゝより起おこる。智者ちやう勘かんへ人ひと

○無性むじやう又人の物をかり。人の物をかりて。かへさぬ  
 者ものハ。兄弟けいだい親友しんゆうといへとも。其志そのし一いつを見て。終つひハ愛想あいさう  
 の尽つるハ金銀きんぎんの上うへ又多おほし。人恒ひとの産うふけきを恒とこの

心こゝろあり。家業かごうを虫精むしせいをる者ものハ。家富かふ栄さかへ。家業かごうを怠おこた  
 る者ものハ必かならず亡なぶ。人間にんげんの百樂ひやくらくハ財寶ざいほうを聚あつるよ。志しく老らうハ  
 不ふし。歌うたよ

○若わかきより年終としのしりる迄までの樂たのしみハ金取かねと業ごうよ志しく者ものハ不ふし  
 と。是こゝは相遠あひとほふし。富とみハ人の欲ほむる所ところ。貪あまハ人の憎にくむ所ところ  
 也なり。人貧ひとひん乏ひんある時ときハ。不良ふりやうの心こゝろ。放僻ほうへき邪志じやしを起おこす者もの也富  
 ありむ。不良ふりやうの心こゝろ。放僻ほうへき邪志じやしを起おこす者ものハ不ふし。若わかき貧ひん志しく  
 して。寡欲くわよくありむ。是こゝを清貧せいひんといふ。是こゝ等らハ。世よを捨すてたる  
 又またあらず。世よ又捨すてらむて。僅わずかう一ひと分ぶんを守まもるのこゝ。さきむ。  
 死後しごの名譽めいよよりハ。生前しぜんの富とみ又志しかず。佛神ぶつじんの利益りやくより



ハ。金銀の利益がまさきり。此故又君子ハ。錢を元と考て。孔兄といふ。金銭阿る者ハ強ク。金銭あき者ハよ  
 二一。金銭多き者ハ。前又居り。金銭少き者ハ後  
 ろ又居る又金銀の多き者ハ。主人とあり。金銀のあき  
 者ハ。家未下部とある。金銀の事たる泉とあり。万民  
 曰く又用ひて。其源と尽すと。此故又四文錢の裏又  
 浪阿り金銭ハ神物ある哉位あく考て貴く。勢ひあ  
 く考て。賑合多し。金銀阿る所ハ。危きも安から考め。  
 死考るも活考め。金銀あき所ハ。貴きもいや考くあり。  
 生るも殺考む。愈諍辨詔も。金銀さへ阿るを勝。あ

だも恨も。金銀をやきえ。とけ安し。落し。浄瑠  
 理等の控藝也。金銀があげきや。始まらず。一切の事。  
 金銀があくてハ。何事も出来ぬと考るへし。金銀あき  
 を。鬼も使ひ鬼も考下とある。いふんや人間をや。是ふ  
 よつて。身をおさめ。家業を出精考て。儉約を守り。金  
 銀を沢山又持べし。神とやいふん。佛とやいふん。人間の  
 王たるべし  
 ○子夏の曰。死生命あり。富貴天又阿りと。いふとけき考  
 えきがい。おもん見るふ。死生命あく。富貴ハ金銀又阿  
 り。何を以て。考ると考らた。金銀ハよく禍ひを轉トて。



福ひとあり。危きも安からきめ。長短人相貴賤上下。皆金銀あり。金銀あきま。短も長とあり。人相の思きも。善相とあり。賤者きも貴く見へる。下の者も。上とある。愚鈍ある者も。利根と見へる。是皆金銀の徳あり。佛神天も。金銀は及びありん。此故よ水滸傳拾遺九。金錢何きむ。本佛も首べを回らすべし。況や是世間利は走る人をやと有り。此心ハ金銀何きむ。佛神もかへり見て。悦びありんや世間の。強欲無道の人間ハ。いっよと志ても。自由のたる者なきむ。金銀をかりがる答の事也と。いふ事也。又金かせの家ハ。餘慶有り。

借金の家ハ。餘殃ありと。此心ハ金銀の沢山は積で。ある家ハ。何事ハ徳を志て。存知よらぬ大仕合有り。金銀のあい。借金する家ハ。存知よらぬ損失有りて。弥く貧乏するといふ事也。是ハ。是又も相違何るべからず。窮達開塞貧窮を賑と。乏志きを救ふハ金銀あり。こきふよつて。佛神天も。金銀不及をすと。いふ者也。

○臧武仲が智。卞莊子が勇。冉求が藝のこときハ。是を以て人とあせり。今の人とある者ハ。志からず。唯金銀は何るの。此故よ今金銀の中かの事何きむ。命よかけ



て也。海の底へも入べし。又命もかけても。山の奥へも入べし。是片時もあつて。あらぬ物ある故あり。是其大略也。金銀ハ誠まこと又貴たかむべし。せよべからず。然るも金銀あき若のいじく。富者ハ其心のやいと。是ひげんで。且かつ又また福たむな。り聖賢といへとも金銭なき時ハ一日も生かたし先何ハ免とぬ物也。貧ハ諸道の妨げといひ。又死苦より也。貧苦ハ苦といひ。又四百四病の煩わづらひより也。びんがどつらき者ハあつといひ。諺ことわざ又てもよくあるべし。此理も何事あるを。身をよくおさめ。家業を出精し。儉約けんやくを守りて。むた錢をせよべからず。此大切ある金銀を。悪事小

をひむた又せよハ。誠まこと又天罰道てんばつのみちきがたし。深く是を思ふべし。かやう又大切ある金銀故也。毎理毎性よちがり。人の物を唯取たがり。かへさぬ杯ハ。至てよろしからず。此又入用あき也。先換さきかひも大入用也。亦るよかりてかへさず。山をたくも。空偽うつろりを以て。人の金銀を取らんとするハ。大悪事也。唯家業を出精して。そろく貯へも。大事の金銀あき也。むた又せよべからず。悪事又せよべからず。何卒善事よをひたし。妻子けんぞくの為。万民の為よせよべし。仁義禮智信を第一と志て。其身くのがどを志りて。上を見す。下を見て。足事を志りて。くら



すべし

○誰くも我より下とを見くらべて。其身くの程を志るべし。此歌の通り又心始て。一生安心よくくらべし

○あけても心の終又せひあむ。境よく深をうめるあるべし

○金銀ハ神や佛よ主君ぞと。忌き貴くきふ道きあり

○一貫をせひ安し。一銭ハ求めがたしと。乃又志るべし

○人ハ唯智慧や威勢又忌き祢ど。金又ハ忌る金を持べし

○若きより年終迄の樂くハ。金取道又志く者そあり

○祢ざめよ徳有る事を思案せよ。徒ら事を案ずべからん

○損の道面白くたあさず志て。徳有る事を苦志くもせよ

○長者山へ上りて奢る道へ出ハむをや下まる道と志るべし

○宝ら多く。何つても尽る期何りと。其心始を常又忘るる

○長者ともあつての後ハ。仁義礼よく行ひて。よき人と志る

○都て凡人のくせと志て。金銀を有益の事ハ。薄くせひ

○益益のおごりおハ。厚くせよ。是人情の常也。さまハ世ハ

○有る人。金銀有る者ハ。有益の事ハ。力をいきて。貧窮の

○親族を救ひ。因縁何れ村里を賑ハし。先祖の石塔墓所を

○直し。子供の為よ。善師を志らきて。仁義礼智信の五

○常を教へ。家の修覆をよくすべし。是をよくする者

○ハ大善事と志て。福壽増長する人あり。又淫酒又耽り。

日月心法金五篇一

二十一



衣服いふくは美ひを尽つくす。物見ものみは山やま。日を費つや。子供こどもは遊あそび。藝げいおどりを習まなハせ杯さかする事ハ。おどりの沙汰さたあまむ。赤あかハ家いへおとろへ。貧賤ひんせんの身みとあつて。難たが渋しぶすべし。是こよつて。有益えきぎハ身み分ぶん相應おとこす。金銀きんぎんを遣つかひ。無益むえきの事こと又またハ。一錢いちせんもせハぬやう又またすべし。是こぞよき智者ちやうといふ

○深山しんざん又また宝たから有り。貨たから又また心こころあき者もの。是こを得うるといふ。貧欲ひんよくの者もの又またハ。天道てんたう大金たいきんをあけさせぬ。唯ただ能よ身みを慎まむ。正直しやうじき又また家業かぎふ出精しゆしやうして居ゐる者もの又また。天あまより一ひとの富とみを落おしぬか天あまの配劑はいざいあり。宝たからハ心こころあき者ものハ無欲むよく

ある故ゆゑ又また。天道てんたうより思おもハぬ宝たからを授さづけぬへを。欲よくなるむいらぬ者もの也なり。身み又また應おこせぬ望のぞむをやめて。家業かぎふを出精しゆしやうして。天あま又また任まかせたるがよし。此こゝ語ことばが腹はらへ考かみわたまむ。一生いしやう無事むじなり。さまむ貧福ひんふくハ。銘めいくの心こころありて。金銀きんぎんの上うへハあし。真まことの福ふくといふハ。道みちを聞きて。身みのふどくを守まもり。足事あしじを知しりて。其外そのほかを願ねがはず。徳とくを修おこめて。業わざを樂たのむ。善ぜんを植うて。報むかひを求もとめず。妻子さいし和合わがちて。不孝ふかうの子こ弟ていなく。親類しんるい和睦わくちて。不義ふぎの奴僕ぬがくあし。人ひと其善そのぜんを称ほちて。傍友かうゆう其何そのなにやまを告つる時ときハ。人間にやうかんの富貴ふうき此上こゝあし。此故こゝ又また無事むじハ。是寶たからありといへり。人ひと其善そのぜんを称ほちする時ときハ。護まも



言おこらず。朋友其あやゆりを告る時ハ。改むる便  
り有り。貴きハ聖賢より。貴きハか。富ハ道德を畜し  
より。富あるハか。貧者きハ。道を聞ざるより。まづ  
老きをあ。賤きハ耻を老らざるより。いや老きハあ  
。老む君子の富貴とする所を。小人ハ是を貧賤と  
す。小人ハ。君子の樂くと。老む所を。老らざる也  
○苟老くも利を先とする時ハ。棄ハせんを飽ず。夫高位  
貴人たりとも。利をかりを見て。仁義よらざる人ハ。心  
いや老くして。又其利逆失あり。仁義を先と考て。利  
を以るハ。善利又考て。天録あり。又下賤の者ハ。利斗り

を見て。高賣を致。百姓を致。日雇取を成るた。  
何まりあやまりハ。何るべからず。夫とて。仁義正直の  
心あり。人の物を余慶也。取さへををよいと。思ふ。欲  
の深き人ハ。油巧があらぬとて。人あ憎まき。うとがハ  
きて。却て損をする事多。然らば下賤の者さへ。利  
を先と成る事ハ。あ。い。んや貴人高位の人。又相  
應ふくらす人ハ。猶更仁義を先と考て。一切の事を志  
すべ。是天理あり。又足事を考る者ハ富。足事を志  
らざる者ハ。窮す。周公の文の美あり。驕り且吝か  
あらむ。君子是をいや考む。何ぞ義を捨て。利を取べ







持と女房ハ。一騎當千又切てまはり。在郷又田地持の甥  
 あり。是を名跡と定め。有明のかはり。常香盤を以  
 て。身の油を絞りて。爪の先火をとも。半枚の附  
 木を惜みて。火を打て草履を見せ。こん意の人でも。只  
 ハ通さぬといつ。各番あり利の為又がんのふやむ時  
 あり。貪欲深く考て。人のふんぎをかまはず。人のふ  
 ところを。あてよ考て。身上のからくりを致し。一束摺  
 との大利を好む。至極何ふあき世波りを致し。真直  
 ある道を行ず。手前勝手といふ物を。年中考て。己の  
 こよい事を。せんとする故。人の油取せず。て。ゆふ

けさせぬ也。何所も荒神様うあまを。手前勝手むか  
 りハ出来がたし。飲食又奢らず。物見松山もせず世も  
 かざらず。袴羅も張祢也。其心さま。殊といや。足事の二  
 字を知らざまを。物事く。不足の念有りて。常又煩  
 惱多し。其上ふ身上のよくある。氣をひふ。是孔子  
 の吝りあらを。其余ハ見るふたらずと。そ考りゆふ入  
 あり。聖語のむふ。からざるを知るべし。あきあよつ  
 て。何まり貪欲を致せば。唯足事を考りて。我身  
 の儉約を専らと考て。安心又世の中をくらすべし。是  
 より外ふ。よき道ハあきと考るべし



○孟子利を捨て。仁義を説く。賢人あり。天の時ハ地の利小者かず。地の利ハ人の和と小者かず。人の和屯るハ徳小あり軍旅のミお何より商人の店を出すも。たとひ地の利を忽らぶ也。人の和あき時ハ。繁昌者分たし。人の和を治るといふハ代物をよく志て。随分と安く賣ふ所り。高利を取てハ人の和ハ得かたし。又代物をよく志て。安くうるが商人の仁義也。身緒をよくするの道あり。若安くうる事を志らず。利をむさがる者ハ。たとひ一旦地の利を得て。家を肥すは忽ち亡ふべし。高貴の人ハ勿論たとひ町入百姓た

りとむ。仁義の心を旨と志て。随分と利を薄くすべし。さすまば。人と和合屯る事。疑ひあり。よく考へて見るべし。むさがりて利を厚く取ても一生。又仁義の心を持って。利を薄く取ても一生。然らば利を薄く取る小勝り何ると志るべし。齊の景公ハ。馬千駟有り。死屯るの日。民徳と志て。稱屯る事あり。伯夷叔齊ハ。首陽の下小餓死す。民今又到るまで。こまを稱すと。此心ハ齊の景公ハ生る時。徳あくと志て。馬をかり多く志て。四千匹あり。亦共死屯る時ハ。身名世あくと志て。人稱美屯る事あり。伯夷叔齊ハ。武王紂王をうち去



小時。武王をいさめたまはせ。きく。五ハざるを以て。首陽  
 山さん小かくきて。終つひに餓死がしたり。民たみ其操そのさうの正ただきき。戕  
 称ほめ美めせり。景公けいこうの富貴ふき。馬うまの多おほきを以て。称ほめ羨えんず。伯夷はくい  
 叔齊しゅせいの仁忠にちゆうを称ほめ羨えんせり。尔しからむ。何なんまり。每ごと理り無む性せい小。貪おん  
 欲よくを志して。福樂ふらくを以もつんとする事こともあらず。景公けいこう伯夷はくい等ら  
 を考かんがふべし。何なんまり。富とみを謀まかりて。利りの為ため小。寢食しんじくを忘わす  
 せ。慈悲じひを思おもハす。人倫にんりんの大道だうだうを知らず。造つく悪あく不善ぜん小  
 志して。罪つみを増ます。己おのれの志しハらず。死しす。貪欲おんよくの人ひととハある  
 べからず。夫これレ大おほひの富とみを致いたす者ものハ。高利こうりをむかさらず  
 ず。無理非道むりひだうをせず。爰こゝを以て増ます富とみり。此理このことをよく

さとるべし。大福長者とある小ハ。高利を取らば。每  
 理非道をせず。順道の小利をつとめて。數万の財宝と  
 なる。無理を志て。高利を取る人小。大福長者なり。  
 世間を考へ見るべし  
 ○万物の靈たる人間ハ。貪欲を志てハ。悪志あくしきの苦くるしみなり。  
 畜生ちくじやうでさへ。貪欲ハ大おほひの志しること。説法せっぽう續つづ因縁いんえん集あつハ  
 云い。狗いぬあり。兩寺りゆうじの中ちゆうにて養やしなひ。其寺の間そのまにて一いつの河か  
 あり。東ひがしの寺じに。食時じきじの鐘かねの音ねがすまむ。即すなはち東  
 へ到いたり。西にしの方かたの寺じで食時じきじの鐘かねのある時ときハ。即すなはち西  
 へ走はる。何なんる日ひ兩寺の鐘一時いつじ小鳴なる。彼の狗いぬ。東ひがしへ往ゆん



と欲をまきむ。又西の方此食のよからん事を思ひ。又西へ到らんと欲をまきむ。又東の寺の食の羨あらん事を思ひ。此故中途不往來志て、遂に兩寺に到る事阿た已す志て。河の中間不阿つて。阿ちららへ往んら。こちらへ往んらと。苦勞する中不心がてんどう志て。水の押流さきて。沈んで泡をぶくくくと吹て死したり。是貪欲深き故。心が散乱志て。どちらの食も有りつらず。阿ますさへ。河の中で死るとハ。おのが心の散乱故。おのが命を失ふたり。阿まり欲深く志て。阿寺の羨食をたべんと志たる阿やまり也。人なる

もあまり欲深くすると。蛇も取らず。蜂も取ずのり多し。唯是事を知りて。放埒なく。執心なく。安らかあ暮しよべし。何おど阿くせく志て。貪欲をかかく。是でよいといふ限りのない者也。よい加減の所不止まるべし

○欲の皮引をり見まぞ。長い物いつをかぎり。計り志らまげ

○人間ハ是事を志りて。さむく志多。ひだるくなく。暮せを此上の仕合志し。其上不後生を願ひ。念佛を唱へて死祈む。此上も志以仕合也

○世の中ハ。阿るは但て事たらぬ。こゝで事たる身こそ安んま



と。此心をよく志るべし。いくらあつてもたらぬ。高貴  
 の方々でも。金銀米穀がたらぬ。其外の者ハ。猶もたらぬ  
 筈と志るべし。是等の事をよく志りて。我ハ寒くあく。  
 ひたるくあく。暮すハ大仕合と志るべし。又此上ハ後生  
 を願ひ。正念佛を中念杯ハ。真俗二諦を兼たる。大智  
 者といふべし。我身ハの仕合を。よろこんで暮すべし。  
 心小かけて常ハ正念佛を出精すべし。現世後生皆小。大  
 安心大福德の人といふべし

○歡樂國の國王の樂ミハ。賢を用ひ、佞を遠ざけ、酒色  
 を好まず。仁小居て。民を子の如く小あ己まき。臣の諫

めを用ゆる事大海の百川を容るるごとく。恩を施せ  
 事。甘雨の万物を養育るるごとく。唯仁政を施する  
 を樂ミと志る人。國よく治まりて。民安く。風ハ條を系  
 らさず。雨ハ五くま城やぶらさず。五穀ハ豊年又志り穂  
 小穂ウさし。國小酷吏入あきさず。賊民小く。耕せ  
 者ハ。畔を由り。道行者ハ道を由り。人の親と志てハ。  
 慈小止まり。人の子と志てハ。孝小止まる。兄弟ハ莫逆  
 中のよ。よて妻子ハ和合し。親族ハむつまじく。朋友を  
 信り。市買ハ掛直をいささず。買入も又直ぎらせ。屍  
 もむすをぬ。安礼の職人あけき。何を搦へるも安



心なり。當ふあて一ふかりこむ人もあけまむ。又拂ひ去おひの檀那たんなもああ一。風俗ふうぞくすへて質朴ちつぱくもああ。若き者ハ。老おいたるを貴たかび富とめる者ハ。貧まきを惠めぐむ。智ちある者ハ。不能たを何なにハままむ。是ここやうなる者ハ。病人びやうじんを歎なげかか一義ぎふ依よてハ。貨たからを惜おしままず。身をころああても。仁にをあさんと心こかけ。各おの々おの陰徳いんとくを積つ事を樂たのむとと是こここる故ゆふ。遠とほきも近ちかきも。風ふうを臨のぞむ。子こを負おて来きり。隣國りんこくハ。臣しん附ふとある。一。蛮貊ばんがくハ。多おほび屯とんつつ貢物きんぶつを奉たる。獸物けいぶつハ。麒麟きりんあり。鳥とりハ。鳳凰ほうおうあり。木きハ。連理れんりあり。草くさハ。靈芝れいしあり。甲冑かうきゆうハ。兵庫へいこ小積つめ也。軍ぐんさせ一。事こともあく。獄舎ごくやハ。僅わずかかか一形

ちああままた。罪人ざいじんハ。たたへへ一。人ひともあ一。是こを内聖外王ないせいがいおうの樂たのむといいふ。國王こくわうたる者ものハ。國くにをかややりあおおささむべ一。大善事だいぜんじ大善人だいぜんじん大聖人だいせいじん也。又また大臣だいじんハ。治乱ちらんの道みちをよく知しりて。真直まっしある政事せいじあり。已おのきをおごり。人ひとをあららむこととる心こころああく。むむかかいい一。膳ぜん小箸せうしゆをあげて。此こゝかかハ。考かくしハ。ああくくだだり。結むすびかけたる髪を握とりて。丁寧ていねい小賢せうけんをむりへ。四時しじ氣候きこうをたがへずあて。農のう業ぎやうをまげま一。蚕うぐいを飼かへら。考かめ。万事ばんじ万民ばんみんの利きある事こと我われ勸すすめて。國土こくどを福祐ふくゆうふあささ考かめ。唯ただ其君そのきみを堯舜ぎやうしん小致せう屯とん事を樂たのむととす。是こより下したの。三司さんし百官ひやくくわん職しやくを守まもりて私ひそかかく皆其位そのゐ下した



つて。公役をよよく勤め。其業を出精するを樂まざ  
る者あり。貴賤上下押あへて。大晦日の修羅道なく  
いつ由も顔色やハラぎ。借たる者ハ。時をたうへず。此  
方より持参志て。かへを樂くとす。俄雨の番傘  
宵闇の挑燈も貸下ささふする者なく。金銀有る者  
ハ。身分相應不施す事を樂くとす。金銀なき者ハ。  
油灯なく持ぎて。人分損かけぬを樂くとす。主ハ家  
来の能不能を為らきて。夫々何ハきく。養ふを  
と志て。給金の安きを樂くとせず。親ハ子を教へ導  
きて。善人とするを樂いと志て。義服をきせず。托

藝を習はせず。花手風流志て。物見柱山物指でお  
つきて。出る事をせず。随分と質素志て。身分相  
應のららしをとするを樂くとす。子ハ親不孝を忌  
親の歡ひゆふを樂くとす。又友を集めて飲食を  
し。夜遊びお出る事をせず。唯親の腰元お居て。家業  
を出精する事を樂とす。妻ハ夫トおよくかいつきて。  
操不を正志くして。内をよくおさむるを樂くと志  
て。衣裳を着かさり。ム一算のんご。金銀をつい  
やさ。女児の養入お假托て。歌舞伎を觀おゆくを  
樂くとせず。朋輩ハへだてなく。断金の交りを志て。

日用心法金言集上  
三十一



悪友事何まをいさめをいきて。善小おもむり考むる  
 事を樂くとす。此故小親類よむ。ます事多し。又神  
 主ハ。初徳の多きを樂くとせず。唯氏子の為小丹精  
 を抽ん出て。其幸ひを祈るを樂くとす。爰を以て。  
 初徳多し。和尚ハ。又布施の多きを樂くとせず。只  
 檀家の為小。讀經念佛志て。先祖の菩提を祈り。有  
 縁無縁の精靈の田向まを樂くとする故小おのづ  
 か、布施多し。醫者ハ。病家の貧福と。茶礼の輕重  
 を考らむす。病ひをいやす事を樂くとする者ハ。  
 五節句の藥礼多し。又文武の師たる者ハ。二季の謝

義を樂くとせず。子弟を教育志て。道を傳へ業を授  
 くるを樂くとする故小。名実四海小溢きて。尊まざる  
 者小し。弟子ハ其藝をよくせんと志て。文能ふ不こら  
 ず。只其言行を慎む。師を敬ひ。他を誅らざるを樂  
 とす。其樂む所各小同一からずといへ也。仁義礼智信  
 の五常此道小。遠小者小けきた。其樂む何まりありて。  
 哀小なく。喜ひ何まりあまた。憂ひ小し。かゝる必小  
 生る。畜生まて。畜生相應の樂むあり。馬ハ轡を好志  
 て。蹴事をせず。人を乗せ。物を負ひ。何たりまへの駈  
 賃を取て主人小放す事を樂くとす。牛ハ角をふり



まはして。人をつくる事をせむ。車を挽て。山坂を上下志  
 て。主人の為に。持を樂くとす。犬ハ門戸を守り。賊  
 を防ぐを樂くと考て。友犬とかえ合ひ。人おらひ付  
 事をせず。猫ハ鼠を取を樂くと考て。魚肉を盗む。灰  
 の中へ糞をする事をせず。雞ハ時を告。人の目を覺  
 す事を樂くと考て。枕合する事をせず。猛獸惡魚毒  
 虫お至る迄。物をやぶらざるを樂くと考て。虎ハ  
 猫のごとく。人お馴せ。狼ハ狗の如く。人おあつき。鯨ハ  
 守宮のやうお思ハせ。鯨ハたぶをせのやうお思ハせ。  
 蜘蛛ハ蚯蚓のやうお思ハせ。蜂ハ蛇よりもやさ考く。

蚤蚊ハ人の身おつりず。國ハ惡水毒草おけきバ。  
 人ハ惡心不善の者お一。夢想兵衛。此國の光景を  
 見て。直何きまお。あきま果て。考きりお不仁不義  
 不孝の國を。耻ケ敷思ひ。世界おわか。る目お波國何ら  
 んとハ。夢おも考らず。誠お天下泰平國土安穩とハ。是  
 をいおあるべし。其外他國を見るお。大方の人。樂くと  
 思ふハ。驕りを極め。欲おふけり。不善の業をおす事  
 多し。然るお此歡樂國の樂むハ。堯舜の樂むといふ  
 哉。いりて。是お増す事何らんや。無為お考て。治ま  
 る物ハ。聖王の徳也。教へず考て。道何る者。仁人の恩澤



ありとあり。帝王ていおうの仁政にせいを行おこふは子こをよよくかきたり。是こゝの  
人ひともよよき道みちを行おこふは子こをよよくかきたり。是こゝの  
て。人ひとのよよき行ことはひひの種たねを致いたすべし。

*（Faint bleed-through text from the reverse side of the page, including characters like 仁政, 行, 子, 種, 致, 善, 悪, 心, 法, 鈔, 五, 篇, 隨, 筆, 上, 終）*

日用心法鈔五篇隨筆上 終



